ひみつの掟

クリスマスやバレンタインデーなど、人々の生活の中にお菓子やスイーツやと呼ばれるものが人気を帯び、それらは着々と世界に進展していった。当初はそれだけで何ら問題はなくむしろ、経済効果が生まれ良い方向へと向かっているようだった。しかし、いつしか人々の糖の摂取量は異常なほどに増え、肥満や糖尿病を始めとする様々な病にかかるようになっていった。そしてその名を決して口にしてはならないという恐ろしい病がはやり始め、その病の犠牲者がおよそ五百人に達した頃、政府は“一切の糖を含むものを口にすることを禁ずる”と言う命令を下した。これに真っ先に対抗したのは製菓店であった。彼らは命令に背き、今まで通り世にお菓子を作り出していた。

そして悲劇は起きた。ある夜に製菓店を中心に一万件を超える店が放火されたのだ。史上最悪と言われるこの事件(一夜一万店事件)以降、被害に遭わなかった店は次々に閉店していき、世界中で糖を含む商品を売る店は消え去った。しかし、ここで一つ問題が起きた。なぜならすべての糖を否定するということは、伝統的なお菓子のすべてを否定し、極論を言えばその地域や民族の存在をも否定することになるからだ。そういったことから、最終的には糖を認める世界と、認めない世界とに完全に分かれることで、この問題は終了した。だが今でも製菓店が潰される被害が起きているのが現状なのである。

○

つい先ほどの出来事なのだが、私、古馬谷(こばや)ひさかは腹痛がひどくなったと大嘘をついて学校を早退してきた。田舎の学高校だから帰り道はただひたすら畦道を歩いて帰る。かすかに香る梅の花の香りが心を穏やかにしてくれていた。最初の頃は嘘をつくことに嫌悪感を抱いていたのだが、最近は全くで、逆に生活習慣のようにさらっと口から出る。そんな自分がまた恐ろしく思えたりもするのだが。

畦道の端に差し掛かったところで、周りの誰もいないことを確認してから一瞬の隙に茂みに駆け込んだ。そのまま全力で急斜面を駆け上がり、少し開けた場所に出た。そこからは、目印の飛軽石を頼りにひたすら進むだけだ。しかし、この石にはある規則性があり、間違ったまま進んでいくと確実に遭難するのだ。何とも恐ろしい。そして、最後の石をたどった先に、目的の店がある。

こじゃれた店のドアを開けると、どうやら先客がいたようであった。

「おー、お前もサボりか」

カウンター席に座っていた肩幅の広い男がニカっと白い歯を見せて言った。この男は、私の幼馴染の桜原星哉(おうはらせいや)である。私は認めたくはないが、星也が幼馴染だと言ってきかないので、仕方なくそういうことにしてやっている。しかし、この間よりも星哉の歯が白く見えるのはなぜだろう……ああ、そういうことね。

「……星哉こげてる」

「うるせェ。日焼けや、日焼け。春のほうが紫外線は強いんやで」

星哉は父親の影響で小学生の時から野球をしている。中学からはピッチャーをしているらしいが、星哉のチームメイトかつ私の友達曰くなかなか良い投手らしい。
「あと、鼻の頭にクリームついてるよ」
「うるせ……おおぅ、サンキュー」
またチョコレートケーキをほおばっていたらしい。私も同じの、と言って星哉の隣の席に座った。
「そういえば、今日が何の日か知ってる？」
「当たり前やろ。二十年前の今日て言ったら、あの一夜一万店事件の起きた日やんか」
「そうか、あれはひさかちゃんたちが生まれる前だったな」
そう言いながら、満留（まる）が私の前にチョコレートケーキを置いた。
満留はここの店のオーナーだ。満留の他には吉田っちと菊池さんとアルバイトの須賀浪（すがなみ）がいる。満留と吉田っちと菊池さんは同い年のおじさんメンバーなのだ。今日は店には満留しかいないらしい。
“一切の糖を含むものを口にすることを許さない”――お気づきだろうがこの店は、あの命令に逆らってなおも残る数少ない製菓店である。
「なあ、満留はあの事件前からずっとこの店やってたんか？」
「いいや、俺は会社を早期退職してこの店を始めたんだ。あの事件が起きたのは、それから三年後のことだ。俺の店も火がつけられたけど、そこまで甚大な被害にならずに済んだ。が、俺の友人の店は全焼した。そして、そいつは焼けた店の中から遺体で発見された」
「そんな……ひどいね」
「ほんまや」
「でも、何で政府はそこまでする必要があったの？」
「そうや、あんときは糖の多い食い物をすべてのせいにしよった。けど、糖尿病とかは、必ずしも糖の異常接種だけの問題やないやろ」
満留は拭き終えた皿を置いて頷いた。
「その通り。もちろん病の原因が糖の人もいるけど、そうじゃない場合だってもちろんあるさ。けれど、やはり肥満者が増えていたのは事実だった。しかも、子供がお菓子ばかり食べて、三食の食事がおろそかになっていることも非常に問題視されていた。そういうことから、いくらビジネスチャンスがあっても、政府は禁止令を出さなくては、どうにもならなかったのだろうね。そしてその理由が一番ずるい逃げ道だってことさ」
ふーん、と言って私はケーキを口に運んだ。
「あれー？　ひさかちゃん、今は糖の含まれる物を食べるのは禁止なんですよぉ」
「うるさいわ！　星哉だって散々食べてたくせに」
「あれ、そういや、今日は満留だけなんやな」
「あぁ、菊池は買い出し、須賀浪は大学のゼミで休み、吉田は今グッピーの大会があるからって五日ほど前にオーストラリアに行ったよ」

「オーストラリア！？　ってか、グッピーの大会！？」
私と星哉がこれでもかと言うくらいに目を見開いていたらしく、満留は吹きだしていた。
「なんかね、自分の育てたグッピーを展示して、誰のグッピーがヒレや尾が綺麗なのかを争うらしい。そんな大会があるなんて俺も知らなかったけどな。グッピーのかけ合わせによって綺麗さが変わるらしいから、それが結構大変なんだってさ」
「へぇ、吉田っちにそんな趣味があったなんてね」
二口目のケーキを口に運ぼうとしたとき、カランといって店のドアが開いた。と思った瞬間、いきなり悲鳴声が聞こえた。私はびっくりして口に入りかけていたケーキを落っことしてしまった。
「ッッキャーーーーッ！　ねぇねぇ見てこれ！　僕、グッピーたちと最優秀賞取っちゃったぁ！　ねぇねぇすごくなーい？　すごいでしょ、ねぇねぇ」
両方の耳を押さえながら振り向くと、吉田っちが目をキラキラさせながら、賞状とトロフィーを持って立っていた。
「あれー？　みんなどうしちゃったのぉ？　そんなにこわーい顔しちゃって」
「……吉田っち」
「ほんまに」
「うるさい」
うるさい、お調子者、と言う言葉がこれほど似合う人はそう滅多にいないのではないかと思うくらい、吉田っちはうるさい人なのだ。
「でも、すごいやん賞って。見せてや」
私と満留があまりにも冷ややかな目をしていたので、ここは星哉がうまく気を利かせてくれた。星哉はなぜか吉田っちの言動が面白いと思うらしい。私にはまったく分からないのだが。
「えへへーん。でしょー、僕もねぇ、まさか賞を取れるなんて思ってなかったわけじゃなかったんだけどねぇ」
「つまりは取れる自信しかなかったってことが言いたいわけね」
「やだッ。ひさかちゃん、辛辣―！」
辛辣―！　なんて言っておきながら、顔は嬉しそうである。
なんだ、吉田っちはMなのか。いや、Mだろ。
「で、グッピーの選抜チームのメンバーは何匹連れて行ったんだ？」
「あぁ、えーとねぇ。一軍メンバーが一〇匹で、二軍が二〇匹で、ドラフトで負けちゃった組が五匹ってところ。お家に居残り組は五〇匹前後だね」
「それってさ、家で飼ってたらどんどん増えるんじゃないの？」
「えー？　大丈夫だよ。テキトーにポイしてるから」
「ポ……ええ？？　なんで捨てるんや？　生きてんねやろ」
「だって、綺麗じゃないもん」
「可愛さがすべてなの！？」
「うん」
「……吉田っちの方が辛辣！」
私は吉田っちをキッと睨みつけてやった。
「まぁ、そんなものだろうよ。野生では強くないと生きていけない

ように、吉田家の水槽の中では綺麗なグッピーしか育ててもらえないのさ」
「そー、さすがは満留。分かってるね！」
「俺には分からへんなあ」
「うん。まったく」
そのあとは、吉田っちのオーストラリアでのバカ話を聞いて三人で大笑いしていた。
「じゃ、私そろそろ帰るね」
「俺も。満留、ご馳走さん」
吉田っちはお疲れのようで、気持ちよさそうに眠っていた。
「気を付けて帰るんだよ、最近は変出者とか通り魔が多いから」
「大丈夫だって、こんな田舎でなんて。それに、いざとなったら星哉を盾にするから問題ナシよ」
「俺は大ありや！」
「じゃーね」
外に出ると、もうすっかり日が陰っていた。ここは山奥だから、明かりはこの店から漏れ出ている光と、ドアのところにあるランプしかない……おかしい。
「……飛軽石が光ってへんな」
「うん。何かがおかしい」
「満留たちに伝えとくか？」
「んー。とりあえず進もう。他の石がどうなってるのか確かめてから、明日言ったほうがいいと思う」
「そうやな」
けれど、帰り道の途中まで来ても、どの石も光っていなかった。
「やっぱり、おかしいな」
「何かが起きてるんじゃ、まさかここがバレたとか」
「まさか、それは……」
ふと気が付くと、両手に荷物を抱えた菊池さんが立っていた。
「あ。菊池さん、あのね、飛軽石が全然ひか……」
「危ない！　伏せて！」
菊池さんの声で、反射的に伏せようとしたのだが、その勢いのまま星哉の背中を押してしまったため、三人もろとも急な山道を転げ落ちた。
「ぎゃーーーーー」
しかし、この悲鳴を耳にするものはいなかった。そして、この三人は忽然と姿を消したのであった。

○

「……いててて」
体を動かそうとすると、とてつもなく痛い。あの急な道を転げ落ちた時に体を強く打ったと思われる。
「二人とも、大丈夫か！？」
そばにいた菊池さんが心配そうな顔をして私の顔を覗き込んでいた。
「はい、何とか。んん？　星哉は！？」

「……お前の下や、アホ」
「んぎゃ」
どうやら私は星哉の上にずっと乗っていたらしい。
「はよどいてや、重たいわ」
「う、うるさい！　あんたの方が重いわよ！」
「まあまあ二人とも。というか、ここは一体どこなんだ」
私たちは薄暗い山の中にいたはずだ。しかし、今ここはどこまでも草原が続いており、ところどころに大きな木が立っている。そして何とも不思議なのは、先ほどまで夕方だったはずが今は昼であることだ。
「そう思うのも無理のないことですわ」
「そうよね……って、だ、だだ誰よ！」
ティンカーベルのような女の子が、私のすぐ後ろでフワフワと浮いていた。しかし、羽は生えていない。
「申し遅れましたわ。わたくしはエルフィと申します。いつも皆様をあのお店までご案内しておりましたのよ」
「……一度も見たことないんやけど」
「ええ、いつも皆さんとお会いする時は石に姿を変えていましたから、知らなかったのも無理のないことですわ」
「石って、あの飛軽石のことかい」
「ええ、そうですわ」
三人はしばらく顔を見合わせていた。と言うよりも、ただただ驚いて、次の言葉が見つからないといった方が無難かもしれない。
「そ、そんなことって普通あるもんなんか」
「いや、ないでしょ。っていうか、何で今日は光ってなかったの？」
「それが、今わたくしがこの姿になっているというわけなのですわ」
ご説明いたしますわね。と言ってエルフィは話し始めた。
わたくし自身も今のこの状況はよく分からないのですが。ひさか様と星哉様がお帰りになりそうでしたので、そろそろかと思っていましたところ、一人道に迷っているおじさまがいらっしゃいましたの。どなたかと思っていましたが、菊池様でしたので、ちょうど良いと思い、光ろうとしました。が、何か……強い力のようなものに阻まれて、押し返される一方でしたの。どうしましょうかと、思っていましたが、ちょうど三人がお会いになられていましたので、ちょうど良いと思い、大きな石を転がしまして、わたくしと一緒にここへ来たということですわ。
にっこりと笑ってエルフィは話し終わった。
「じゃあ、その強い力のようなものが原因で、でもそれが何かは分からないと。そして万が一の時のため、僕たちをここに連れてきたということかい」
「そういうことですわ」
「万が一のことって……それって、そんなに深刻なことなの？」
エルフィは表情を曇らせて言った。
「……実は前にも同じようなことがあったのですわ。以前の方がもっと大きな力でしたけれども」
「それはいつ？」

「……二十年前の今日ですわ」
一瞬、三人は凍りついた――――まさか！
「に、二十年前の今日……つまり一夜一万店事件の日にも、今日と同じことが起きたっていうことなんか！？」
エルフィは静かにうなずいた。
「それはまずいな」
「ええ。ま！　今は何を考えても無駄ですわ。ですので、とりあえず皆様をお宿にご案内いたしますわね」
「ちょ、ちょっと待った！　大事なことを聞き忘れていたけど、ここは一体どこなのよ！」
菊池さんも星哉もすっかり忘れていたらしい。
「そうや、なんて言っても、さっきまで夕方やったのに今のこの時間帯はどう考えたって真昼間やん」
「まあまあ。気になるとはたくさんあると思いますが、とりあえずお宿に行きましょう。ご安心ください。そこで、詳しくお話しいたしますので」
さあ行きますわよ。と言ってエルフィは再びフワフワと浮いて大きな木の方へ飛び始めた。
「まあ、とりあえず、だ。行こうか」
菊池さんの後を追うように私と星哉も歩き始めた。私はさっきから胸のもやもやが取れない。ここに来てしまったことが、再びあの事件を呼び起こしてしまいそうな気がした。
「おーい。ひさか、何してんねん。はよ来いや」
しかし、本当に今は何を考えても全く分からない。「待ってよー」と言って、私は三人のところへ走って行った。